

大学生における自我同一性地位と進路決定：教育学部生の場合

Ego identity status and career decision in undergraduates: in case of faculty of education

川 畑 秀 明・今 林 俊 一

Hideaki KAWABATA・Shun'ichi IMABAYASHI

キーワード：自我同一性，進路決定，自己イメージ，教職志望傾向

1. はじめに

青年期は自分の生き方に関する具体的な意思決定の時期であると同時に、自我同一性の確立のための重要な時期であるとされる。このような時期において、大学生にとって卒業後の進路選択は卒業するまでに決めるべき重要なライフイベントであり、その進路選択は自己理解に基づく生き方の意思決定の1つであると考えられる。

しかし、教員養成系の教育学部のような目的養成学部においては、多くの場合、学生は大学入学時点で進路を決め、教師になる意思を持って入学してくることを期待されている。その一方、最近では、現実問題として、高等学校における進路指導の成績に基づく進学指導の事情から、卒業後の進路を決めないまま入学してくる学生も少なくない(下山, 1984)。

進路決定には、時間的展望が必要であるとされる(富安, 1997)。時間的展望とは、様々な経験を通して過去を振り返り、現在を見つめ、将来を予想する心理的過程が存在するため、「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」(Lewin, 1951)である(都築, 1993)。

自我同一性の達成は、過去、現在、未来の時間的な流れの中で自己についての継続性や統合性の意識のうえに初めて成り立つという理由から、その基礎には時間的展望の確立が必要であるとされる(都築, 1993)。また、自我同一性地位によって、将来の目標設定のあり方が異なることも報告されている(都築, 1997)。例えば、自我同一性を達成した者は、短期的でより現実的な目標を追求しようとするのに対して、拡散の者は、長期的ではあるが、あまり現実的でなく、自分でも実現

をあまり期待していないような目標を設定する傾向にある。

本研究では、教育学部生の自我同一性地位の違いと進路決定の関係について明らかにし、特に、教職志望傾向と現在の自己イメージの点から、教育学部生の進路決定のあり方を探索的に調べることをとする。

2. 方法

調査形態および調査対象 調査は2003年4月初旬にあたる前期の学部授業の開始後1週目に行った。調査は講義終了後に行い、調査用紙は一斉に配布してその場で回収した。回答には30分程度の時間を要した。質問紙は無記名式とし、学年、年齢、専攻名は記入してもらったが、性別は記入してもらわなかった。調査対象は教育学部生380名。学年は、1年生165名、2年生149名、3年32名、4年17名、大学院修士課程1年生、学部研究生、科目等履修生は各1名、学年無記入は14名であった。分析に際しては、1年生および2年生のみ、計314名を最終的なサンプルとした。

調査内容

(1) 自我同一性地位判定尺度

加藤(1983)が作成した同一性地位判定尺度(12項目)を用いた。この尺度は、「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の3つの因子からなり、これらの変数の値から、同一性達成地位(Attainment; A)、権威受容地位(Foreclosure; F)、積極的モラトリアム地位(Moratorium; M)同一性拡散地位(Diffusion; D)の4つの同一性地位とA-F、D-Mの2つの中間地位を特定することができる。

(2) 教職志望度調査

幼稚園、小学校、中学校、高等学校、養護学校の5種の学校教諭について、それぞれ教職志望度を(1)非常に強く希望している、(2)なつてみたいという気持ちがある、(3)職業の選択肢の1つとして考えている、(4)できるならばなりたくない、(5)絶対になりたくない、(6)よくわからない、の6つのカテゴリーから評価してもらった。

(3) 現在の自己イメージ調査

現在の自己イメージについてふさわしいと思う形容詞(または形容動詞)について20個を上限に記入してもらい、また、それらの単語について、非常によく当てはまる、かなり当てはまる、やや当てはまる、どちらともいえない、の4段階評価をしてもらった。さらに、これらの単語間の印象を一对比較し、その類似度を数値1-7(1:全く似ていない、2:あまり似ていない、3:どちらかというのと似ていない、4:どちらでもない、5:どちらかというのと似ている、6:よく似ている、7:非常によく似ている)で答えてもらった。

(4) 将来展望についての自由記述

今後1年以内、卒業するまで、10年以内の3つのレベルで、それぞれの時期までに達成したい、あるいは挑戦したいと思っていることについて、自由記述で答えてもらった。

3. 結果

自我同一性地位について

まず、加藤(1983)の分類基準を用いて各被験者の自我同一性地位を6つに分類した。この際、調査対象314名のうち自我同一性尺度に無回答だった14名を除き、300名のデータを分析した。その結果、各学年における自我同一性地位の分布はTable 1のようになった。1年生、2年生とも、D-M中間地位が最も多く、次にA-F中間地位、M地位の順に少なくなり、A、F、D地位は最も少なく同程度の人数であった。この結果は、加藤(1983)および都築(1993)の結果と非常に類似していた。また、自我同一性地位ごとに、尺度で用いられた3因子(「現在の自己投入」、「過去の危機」、「将来の自己投入の希求」)の点数を算出した(Table 2)。これら3つの因子

間の相関係数をみると、現在の自己投入と過去の危機の間には有意な相関関係は見られなかったものの($r=0.06$)、現在の自己投入と将来の自己投入の希求($r=0.48, p<0.01$)、過去の危機と将来の自己投入の希求($r=0.29, p<0.01$)との間には有意な相関関係が見られた。

Table 1 各学年における自我同一性達成地位の分布

学年	A	A-F	F	M	D-M	D	N
1年生	5	19	7	16	100	8	155
(%)	(3.2)	(12.3)	(4.5)	(10.3)	(64.5)	(5.2)	
2年生	10	16	3	16	93	7	145
(%)	(6.9)	(11.0)	(2.1)	(11.0)	(64.1)	(4.8)	
N	15	35	10	32	193	15	300

Table 2 各同一性地位における構成因子の平均点数分布

地位	現在の自己投入	過去の危機	将来の自己投入の希求
A	21.47 (1.36)	21.53 (1.19)	19.53 (2.61)
A-F	21.31 (1.32)	17.89 (1.25)	19.54 (1.85)
F	21.50 (1.43)	11.90 (1.66)	17.50 (2.12)
M	16.66 (2.31)	19.06 (2.91)	20.81 (0.86)
D-M	15.39 (2.57)	16.84 (2.99)	16.36 (1.98)
D	9.20 (2.04)	16.80 (3.61)	12.67 (1.40)

()の中の数値は標準偏差を表す

教職志望傾向について

自我同一性地位の分析対象とした300名の中で教職志望度に無回答だった19名を除いた281名のうち、84%に相当する234名は、いずれかの学校種の教職に対し「非常に強く希望している」か「なつてみたいという気持ちがある」という意思を示している。一方、いずれかの学校種の教師に対し、「選択肢の1つとして考えている」と答えたものは16%で47名であった。また、いずれの学校種に対しても、教師に「絶対になりたくない」または「できるならばなりたくない」と答えたも

のはいなかった。このことから1, 2年生であっても教職志望度は比較的高いことがわかった。しかし、「選択肢の1つとして考えている」と答えた者は、はっきりとした進路決定をしているわけではない。そこで、「非常に強く希望している」と答えた158名と「選択肢の1つとして考えている」と答えた47名において、自我同一性地位尺度の3因子の点数に関する2要因分散分析をおこなった(被験者群2×因子における得点3)。その結果、交互作用が有意であり($F=4.60$, $df(2/406)$, $p<0.05$), また、被験者群における主効果および因子における主効果も有意であった(被験者要因: $F=4.46$ $df(1/203)$, $p<0.05$; 因子要因: $F=6.13$ $df(2/406)$, $p<0.001$)。交互作用の単純主効果検定の結果、「現在の自己投入」における2つの被験者群の違いが1%水準で有意であり、また「職業の選択肢の1つとして考えている」群において「現在の自己投入」と他の2つの因子間に1%水準で差が見られた(Figure 1)。このことから、明確な進路意思決定は現在の自己投入の度合いの高さによることが示され、また、「職業の選択肢の1つとして考えている」群は現在の自己投入が低い一方、過去の危機や未来への自己投入の希求が高いという、モラトリウム型の傾向を示す結果となった。そこで、「職業の選択肢の1つとして考えている」群の自我同一性地位の分布を見てもと、A地位3名、A-F地位3名、M地位4名、D-M地位34名、D地位3名となっていた。この結果から、モラトリウム地位の多くが未決定の状態にあるというわけではないが、未決定の特徴として、モラトリウム傾向、すなわち現在の自己投入の弱さが挙げられよう。

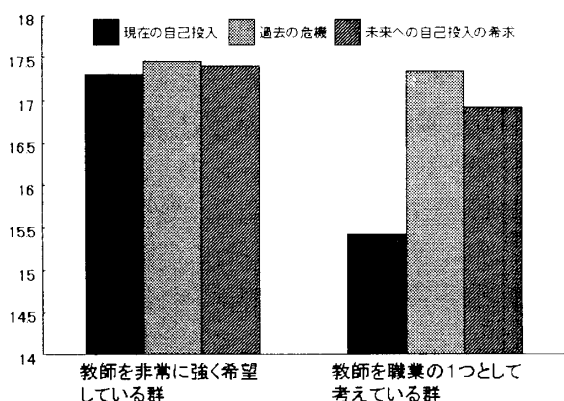


Figure 1. 教師志望傾向と自我同一性獲得の状態の関係

自己イメージについて

自己イメージの調査に関しては、自我同一性地位の特徴を明らかにするために、A-F地位、D-M地位の中間地位を除き、Marcia (1966) が元来提唱した、A, F, MおよびDの4つの地位に属するものに限って分析を行った。この質問調査については、20項目を上限とした形容詞(あるいは形容動詞)による回答であった。そこで、本研究では、全体的傾向を、平均値的な数値処理によらず、個人別態度(personal attitude construct; PAC)の分析(内藤, 1997)と同様の方法を用いて、自我同一性地位別に、自己イメージや態度を個別に分析した。その際、自己イメージに関する連想反応項目間の類似度をもとに、ワード法で平方ユークリッド距離による測定をもとにクラスター分析を行った。また、個別分析に際しては、連想反応項目に対する当てはまりの度合い(4件法)も参考にし、総合的に分析を進めた。

自己イメージに関する連想反応項目は大きく、自己のポジティブな側面(例えば、明るい、積極的な)とネガティブな側面(例えば、憂鬱な、遅い)の2つに分けることができた。

全体的傾向として、A地位はポジティブ・ネガティブの双方の面を受容しており、両側面に対して当てはまりの度合いが高い傾向にある。F地位はポジティブな自己受容が高く、ネガティブな項目が比較的少ない。M地位は、地位A型と同様にポジティブ・ネガティブの双方の面を受容しているが、ネガティブな側面に関する項目についての当てはまりの度合いが、ポジティブな項目よりも高い傾向にある。また、D地位はネガティブな連想反応項目が中心であり、その当てはまりの程度も比較的高い傾向にある。

次に、それぞれの地位別ごとにクラスター分析によって得られたデンドログラムの典型例を示す。

(a) A地位の典型例 (Figure 2)

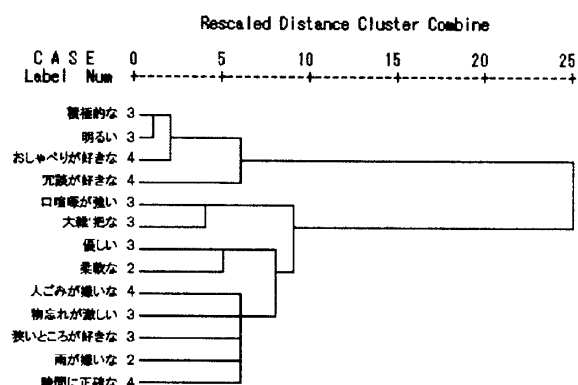


Figure 2. 達成 (A) 地位のクラスター分析の例。項目についている数字は、当てはまりの点数を示す。

この例は、1年生であり、自己イメージの反応項目は、積極的な、明るいなどのポジティブ側面と、物忘れが激しいなどのネガティブな側面からなるが、そのクラスター構造は、単なる2極的状态ではなく、ポジティブな側面の中でも活動的な自己イメージに加え、人ごみが嫌いな、狭いところが嫌いな、などの特定の状況に対する自己感情、優しい、柔軟ななどの内面的側面、大雑把ななどの否定的に捉えている自己イメージがある。このように、A地位は、具体的な自己イメージが確立されている傾向があり、また、全体的に当てはまりの点数も高い。

将来展望の自由記述では、1年以内に英検準1級をとる、初級のマジックを覚える、卒業するまでに英検1級をとる、ワーキングホリデー制度でオーストラリアに行く、10年以内に英語教師になる、結婚するという項目を挙げている。また、教職志望度は、高等学校の教師を非常に強く希望している。この例に限らず、ほとんどのA地位の者は、都築 (1997) と同様に、具体的で実現可能な目標設定を、時間的に実現可能な順に設定している傾向にあるといえる。

(b) F地位の典型例 (Figure 3)

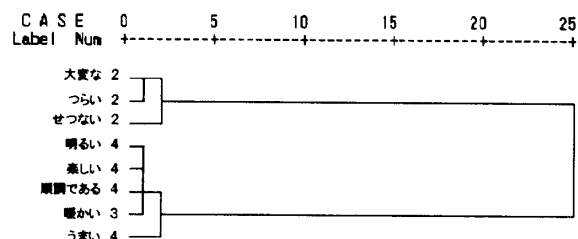


Figure 3. 権威受容 (F) 地位のクラスター分析の例。項目についている数字は、当てはまりの点数を示す。

この例は、1年生であり、自己イメージの反応項目は、明るい、美しい、などのポジティブ側面と、大変な、つらいなどのネガティブな側面からなるとともに、そのクラスターも2極的構造から成り立っている。典型的に、F地位は、ポジティブな自己イメージの受容が強く、ネガティブな自己イメージの受容が低い傾向にある。また、将来展望の自由記述では、1年以内に資格をとる、サークル活動をがんばる、卒業するまでにしっかりした卒論を作成する、将来の夢に向かってしっかりと勉強をする、10年以内に公務員になる、という項目を挙げている。また、教職志望度は、いずれの学校種に対しても教師に「なりたい」程度であった。ほとんどのF地位の者は、A地位とは異なり、時間的計画性を持って目標設定していたり、実現可能かどうかであったりよりも、とにかく今現在やりたいことを中心に将来展望をとらえている傾向にあるといえる。

(c) M地位の典型例 (Figure 4)

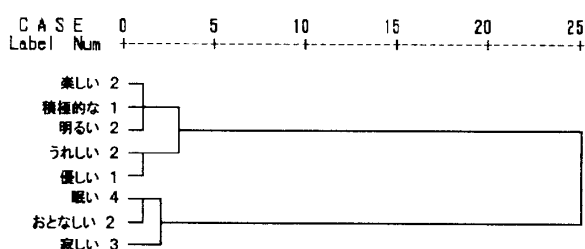


Figure 4. モラトリアム (M) 地位のクラスター分析の例。項目についている数字は、当てはまりの点数を示す。

この例は、2年生であり、自己イメージの反応項目は、美しい、積極的ななどのポジティブ側面と、眠い、おとなしいなどのネガティブな側面からなり、F地位と同様に、クラスターも2極的構造から成り立っている。M地位は、ポジティブな自己イメージの受容が弱いに対して、ネガティブな自己イメージの受容が高い傾向にある。将来展望の自由記述では、1年以内に運転免許をとる、手話を身に付ける、自立する、やせるといった目標を設定し、卒業するまでに海外旅行・国内旅行に行く、貯金をする、保育士の資格をとる、甲子園に行く、10年以内に結婚する、子供を産む、就職する、一人暮らしをする、東京ドームに行く、という項目を挙げている。教職志望度は、幼稚園の教師を「非常に強く希望している」。

Marcia (1966) の定義にあるように、典型的に、M地位の者は、現実の自己投入が低いのにに対し、将来の自己投入の希求は高い。すなわち、実現可能な目標設定をしつつも、目標間の関係性が弱く、自分がやりたいと考えている様々なことを脈絡も少なく記述しているような傾向にある。

(d) D地位の典型例 (Figure 5)

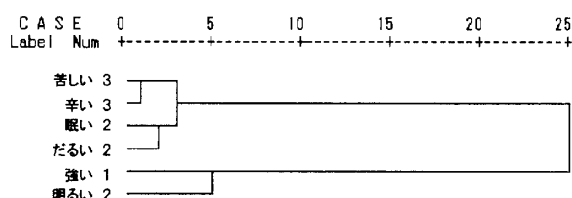


Figure 5. 拡散 (D) 地位のクラスター分析の例。項目についての数字は、当てはまりの点数を示す。

この例は、2年生であり、自己イメージの反応項目は、苦しい、辛いなどのネガティブな側面が中心である。クラスターは、2極的構造から成り立っており、ネガティブ側面と、強いと明るいからなるポジティブ側面による。いずれの項目に対しても、当てはまりの点数は全体的に低く、ネガティブな自己イメージの受容が比較的高い傾向にある。また、将来展望の自由記述では、1年以内に新しいアルバイトを探す、旅行に行く、彼氏（を見つける）、と記述されており、また卒業するまでに貯金をする、海外旅行に行く、10年以内に結婚、子育て、仕事といった項目を挙げている。また、教職志望度は、小学校または養護学校の教師に「なってみたい」程度の希望を示しているが、中学校および幼稚園の教諭に対しては否定的であった。D地位は、長期的かつ現実的な内容の将来展望を示すが、曖昧性が強い、すなわち、都築 (1997) に見られるような自分でも現実をあまり期待していないような目標を設定する傾向にある。

4. 考察

自我同一性に関する4つの地位の間には、時間的展望のあり方に違いが認められている (都築, 1993)。A地位、F地位、M地位は未来志向的であるのに対し、D地位は過去志向的である。ただし、M地位はA地位やF地位に比べて過去・現在・未来の統合度が低い。本研究における自我同

一性地位のそれぞれも同様の時間的志向性を持っていることがうかがえる。特に、D地位における漠然とした将来展望は特徴的であるとともに、自己イメージの結果からも見られるように、現在の状態への意識の薄さも特徴として挙げられよう。また、教職を「非常に強く希望している」と答えた者と「選択肢の1つとして考えている」と答えた者における自我同一性地位尺度3因子（「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」）の点数の比較 (Figure 1) において、教職を選択肢の1つとして考えている、すなわち進路を十分に絞り込めていない者は、それができている者に比べて現在の自己投入が低いという結果が得られており、このことから、現在の自己のあり様が、過去および未来の自己と十分に統合しえていないことを示しているのかもしれない。

進路未決定の学生は2つのタイプ、すなわち、(1) 気質的に高い不安傾向を持つために未決定状態も慢性的となる *indecisive* (不決定) 型と、(2) 進路を決めるための情報が十分でないための *undecided* (未決定) 型に分けることができる (若松, 2001)。教育学部における進路未決定者は、決定者に比べ、自分の抱える問題が何なのかを理解できない傾向にあり、また、未決定者が *indecisive* 型の場合には拡散的に新たな進路の選択肢を求めるということが示されている (若松, 2001)。この未決定者における自分の抱える問題理解の不十分さは、本研究におけるM地位やD地位に見られるような自己イメージのとらえ方の希薄さと関係しているのかもしれない。

将来展望の自由記述にも見られるように、いずれの自我同一性地位であっても、何かしなければならぬ、または何かしたいという希望や意思を持っているようである。ただし、それが現実的であるか、可能性があるか、具体的かという水準で考えると、確かにM地位やD地位は、A地位やF地位に比べて具体性が弱く、自己の状態との関連付けが低いように思われる。また、動機付けの観点からすると、学習者の生き方が個々の課題に取り組む意欲の源泉となっており、また過去の経験や将来の成長を見通すことが現前の課題の価値付けにつながる (伊田, 2002)。そして、このよう

な課題価値と明確な問題意識が、進路決定に影響し、現実的、具体的、短期的な目標を追求しようとする態度に関連しているように思われる。

では、進路決定に現在の自己理解、すなわち自己イメージの具体化が進路決定の意識を高めるとすると、進路未決定の学生に対するサポートをどのように行うことができるであろうか。自我同一性地位尺度における分析で「現在の自己投入」と「将来の自己投入の希求」の間には高い相関関係があることがわかった。すなわち、今やることと、将来やりたいことの間には強い相互関係が存在する。このことは、進路決定についても2つの相互的決定過程のあり方を提供することができよう。1つ目には、現実の自己イメージを高めることにより、将来の自己決定の意識を高めるものであり、「現在の自己投入」が強い場合に適用できよう。つまり、今の自分をじっくり見つめることにより、はっきりした自己イメージをつかみ、自分の興味関心や適性をもとに、進路を決めるための努力が可能になろう。2つ目には、将来の自己イメージを具体化させることにより、現在の状態への意識を高めるものである。M地位のように、将来の自己投入の希求は強い一方、現実の自己投入が弱い場合、自分が渴望する将来の自己像や職業意識についての情報をしっかりつかませることにより、現在、どのような努力が必要とされるのかを理解することが可能になると思われる。例えば、教育学部の場合、教職などに就職した卒業生の話を聞く機会を作ることにより、将来の自己像と重ね合わせることが可能となろう。さらに、実際にその職業に就いた人の話を聞くことは、自分がその職業に就いた際に、今現在どのような努力をしておけばいいかを具体化することができ、短期的目標を立てて自己投入をすることが可能になると思われる。

本研究は、自己イメージと教職志望傾向の点から自我同一性と進路決定を探索的に関係づけることが目的であった。より、具体的な進路決定のサポートや方策を得るためには、個別的なガイダンスと、継時的な追跡による個人の変容プロセスを明らかにする必要がある。本研究で用いたPAC分析は元来、個別態度を表面的に明らかにするだ

けでなく、その個人による反応項目のカテゴリー構造の解釈を個人面接から得るという作業を必要とするものである。この作業を継時的に導入することにより、個人の自我同一性や自己イメージの客観的理解とカウンセリング的な進路決定のサポートを行うことができると考えられる。

引用文献

- 伊田勝憲 2002 大学生の教職志望動機と学習動機の関係についての探索的検討 青年心理学会第10回大会発表論文集, 30-31.
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 内藤哲雄 1997 PAC分析実施法入門:「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 下山晴彦 1984 ある高校の進路決定過程の縦断的研究 教育心理学研究, 32, 206-211.
- 都築 学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- 都築 学 1997 大学生における将来目標の内容と構造 教育学論集(中央大学教育学研究会), 39, 69-96.
- 富安浩樹 1997 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関係, 教育心理学研究, 45, 329-336.
- 若松養亮 2001 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて:教員養成学部の学生を対象に 教育心理学研究, 49, 209-218.

謝 辞

分析に際して、心理学科の学生である西山浩史君の協力を得た。ここに感謝したい。